# 第11章

# 入学者選抜試験の変遷

## 1　開学当初の入試

（1）開学時の入学者選抜 ……1210
（2）進学適性検査 ……1212

## 2　1978年度以前の入試

（1）能研テスト ……1213
（2）Ⅰ期校・Ⅱ期校の区分 ……1214

## 3　共通一次学力試験（1979年度開始）以降の入試

（1）入試期日の一本化 ……1215
（2）受験機会の複数化 ……1216
（3）入学試験場借用の諸事情 ……1217
（4）金沢大学の２段階選抜 ……1223
（5）大学入試センター試験 ……1225
（6）特別選抜の実施 ……1226
（7）金沢大学入学者選抜試験に係る打合会の開催について ……1227
（8）入試事務電算処理の推移 ……1227

## 4　大学紹介・広報の時代

（１）見学会 ……1228
（２）学部主催の見学会等 ……1229
（３）大学案内・ホームページ・テレホンサービス・ハートシステムの充実 ……1230
（４）北陸３県高等学校長等との入試懇談会 ……1231
（５）出題の解答例の公表等 ……1231

## 5　回想・金沢大学の入学試験

（１）鈴木寛元学生部長の回想（入試対応のあれこれ）……1232
（２）1960～70年代入試の思い出 ……1233

# 1　開学当初の入試

## （1）開学時の入学者選抜

表１１－１　入学者選抜試験年表

| | |
|---|---|
| 1949年（昭和24） | Ⅰ期校・Ⅱ期校<br>進学適性検査 |
| 1963 | 能研テスト |
| 1979 | 共通1次学力試験<br>第2次試験一本化 |
| 1987 | 受験機会の複数化<br>（連続方式） |
| 1989（平成元） | （分離・分割方式） |
| 1990 | 大学入試<br>センター試験 |

新制国立大学の入学試験は1949（昭和24）年に、Ⅰ期校・Ⅱ期校制により開始された。その特徴としては、①受験資格を有するすべての志願者に学力検査を課し、その結果と調査書とによる総合選抜であること、②入学試験に先立ち、全国一斉に実施の進学適性検査を受験させたこと、③入試実施期日が大学単位で第Ⅰ期・Ⅱ期に分割され、国立大学進学希望者に２回の受験機会が与えられたことなどがあげられる。

新制大学最初の入試に関して、文部省が配布している「昭和24年度新制大学（並びに専門学校等）入学者選抜方法の解説」によれば、高等教育を受けるに最も適応した能力を備えている者を選抜すること、下級学校の教育を理解しその円満な発展を助長するような選抜方法をとること、入学者選抜自体が一つの教育であるから教育目的に沿うように選抜方針を立てることを掲げ、高等教育機関は選抜によって３条件を果たす義務があろうとし、このことによって、入学者の判定は進学適性検査・学力検査・身体検査および調査書の成績を総合して行うものとされた。

学力検査の教科群は、新制高等学校や旧制高等学校の教科課程を検討して、国語（国語）、社会（一般社会・東洋史・西洋史・人文地理・時事問題・国史）、数学（解析１・解析２・幾何）、理科（物理・化学・生物・地学）、外国語（英語・ドイツ語・フランス語など）と定められ、「教科群は学校が選定して出題し、教科群に属する教科は受検者が選択して解答する」こととされた。解説はこのことについて、「５教科の全部にわたって出題するか、あるいは一部の教科群を選択して出題するかは自由であるが、志願者の能力をあらゆる角度から検出する必要や、高等教育を受けようとするものが円満な一般教養をもたねばならないことから言っても、あるいは学力検査を通じて下級学校の教育の正常な発展を指導する責任から言っても、なるべくこの全教科群にわたって出題されることが望ましい」とされている。

新制大学発足以降の入試では、すべての入学資格を有する者を平等に扱い、学力検査を課し、その結果を重視して合否を判定したが、旧学制下での高等学校・専門学校の入学者選抜は、全志願者に競争試験を課し、旧制大学では入学に関し出身学校によって順位を異にする優先順位制が採られていた。（予科をもつ大学では予科修了者に、予科をもたない大学の文科系学部では高等学校文科卒業者に、理工医系学部では高等学校理科卒業者に、そ

れぞれ入学について第一位の優先順位を与えていた。）優先順位第一位の志願者数が定員を超えた場合は、その第一位の者のみについて競争試験が実施された。この競争試験により排除された者（進学の希望があるのに帝国大学・官立大学に入学できなかった者）が「白線浪人」となった。優先順位第一位の志願者が定員以下の場合は全員が合格となり、欠員の部分が優先順位第二位以下の者に振り向けられる。第二位以下の学歴による順位の決定方法は大学、学部ごとに異なっていた。第二位以下には高等学校以外の学歴の者が指定され「傍系入学者」と通称された。なお、1946年度入試から、帝国大学・官立単科大学においても優先入学制は全面的に撤廃された。（開学当時の金沢大学「入学者選抜要項」・「入学案内」、「入学者出身学校別調」および「出身県別調」を文末に掲載。）

文部省の白線浪人対策（1949年11月29日付通達）は、旧制の各大学を二期に分けて昭和24年度選抜試験を実施する、旧制大学の各学部学科の入学定員をできるかぎり増加させる、二期に分けての試験により二重入学や入学取消などを防止するため第一期の大学は合格発表をできるだけ早く行うことを各国立大学（旧制）に通達している。（金沢医科大学は第一期に所属。）なお、旧制大学としての白線浪人対策は1950（昭和25）年入試をもって終了している。（「白線浪人」の呼称は、旧制高等学校生の制帽がその横腹に白線を巻きつけていたところから生まれている。）

表１１－２　1949年度「金沢大学学部入学者出身学校別調」

| 区分 | | 学部別 | 法文学部 | | 教育学部 | | 理学部甲 | | 理学部乙 | | 薬学部 | | 工学部 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 志望者数 | 入学者数 | 志望者数 | 入学者数 | 志望者数 | 入学者数 | 志望者数 | 入学者数 | 志望者数 | 入学者数 | 志望者数 | 入学者数 | |
| 石川県内の学校 | 新制大学編成学校 | 大学 | | | | | | | | | | | | | |
| | | 大学予科 | | | | | | | | | | | | | |
| | | 大学附属専門部 | 1 | 1 | | | | | 4 | | 13 | 12 | | | |
| | | 専門学校 | 11 | 8 | 1 | | 1 | 1 | 5 | 1 | 2 | 2 | 71 | 30 | |
| | | 旧制高等学校 | 109 | 60 | 8 | 3 | 38 | 23 | 64 | 25 | 5 | 4 | 69 | 64 | |
| | | 教員養成諸学校 | 51 | 37 | 222 | 148 | 38 | 29 | 10 | 1 | 1 | 1 | 6 | 2 | |
| | 公私立大学予科 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 公私立大学附属専門部 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 公私立専門学校 | | 2 | 2 | | | | | | | | | | | |
| | 公私立高等学校 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 新制高等学校 | | 135 | 74 | 132 | 81 | 24 | 15 | 25 | 3 | 20 | 12 | 68 | 12 | |
| | 高学検専卒検合格者 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 認定試験合格者 | | 2 | 1 | | | 3 | 3 | | | | | 1 | | |
| | その他 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| | 小計 | | 311 | 183 | 363 | 232 | 104 | 71 | 108 | 30 | 41 | 31 | 216 | 108 | |
| 他県（都道府）の学校 | 官立 | 大学予科 | | | | | | | | | | | | | |
| | | 大学附属専門部 | | | | | | | 1 | | | | | | |
| | | 専門学校 | 10 | 7 | 3 | | 1 | 1 | 7 | 2 | | | 9 | | |
| | | 高等学校 | 39 | 17 | 2 | 1 | 8 | 5 | 89 | 20 | 3 | 2 | 24 | 16 | |
| | | 教員養成諸学校 | 4 | 1 | 5 | 1 | 1 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | | | |
| | 公私立大学予科 | | 3 | 2 | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | 公私立大学附属専門部 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| | 公私立専門学校 | | 4 | 3 | | | | | | | 1 | | 6 | | |
| | 公私立高等学校 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 新制高等学校 | | 90 | 39 | 15 | 8 | 16 | 8 | 87 | 4 | 12 | 5 | 40 | 8 | |
| | 高学検専卒検合格者 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 認定試験合格者 | | 6 | 3 | | | 1 | 1 | 4 | 1 | | | 1 | 1 | |
| | その他 | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 小計 | | 157 | 72 | 25 | 10 | 27 | 16 | 192 | 28 | 19 | 9 | 81 | 26 | |
| 合計 | | | 468 | 255 | 388 | 242 | 131 | 87 | 300 | 58 | 60 | 40 | 297 | 134 | |

表１１－３　1949年度「入学学生出身県別調」

| 府県名 | 法文学部 | 理学部甲 | 理学部乙 | 薬学部 | 工学部 | 教育学部 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 一甲 | 一乙 | 二甲 | 二乙 | 三部 | |
| 金沢市 | 84 | 30 | 11 | 12 | 44 | 13 | 18 | 12 | 14 | 4 | 242 |
| 小松市 | 14 | 1 | | 1 | 5 | 5 | 2 | 8 | 5 | | 41 |
| 七尾市 | 3 | 1 | | 2 | | 1 | 1 | 2 | 1 | | 11 |
| 能　美 | 4 | | 1 | 2 | 1 | | 1 | 3 | 6 | 1 | 19 |
| 江　沼 | 8 | 1 | 2 | | 3 | 5 | 3 | 5 | 3 | 2 | 32 |
| 石　川 | 5 | 1 | | 1 | 1 | 4 | | 4 | 6 | 2 | 24 |
| 河　北 | 7 | | 1 | 2 | 5 | 2 | 2 | 10 | 4 | | 33 |
| 羽　咋 | 12 | 4 | | 4 | 4 | 7 | 2 | 11 | 10 | 3 | 57 |
| 鹿　島 | 6 | 2 | | 1 | 3 | 2 | | 3 | 2 | 1 | 20 |
| 鳳　至 | 7 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 | 7 | 2 | 7 | 1 | 33 |
| 珠　洲 | 2 | 1 | | | | | 7 | 4 | 5 | 1 | 20 |
| 北海道 | 2 | | | | 1 | | | | | | 3 |
| 秋　田 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | 3 |
| 栃　木 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 群　馬 | 1 | | 1 | | | | | | | | 2 |
| 東　京 | 2 | 1 | 1 | | 1 | | | 1 | | | 6 |
| 神奈川 | 1 | 2 | | | | | | | | | 3 |
| 岐　阜 | 3 | 3 | | | | | | | | | 6 |
| 静　岡 | | 2 | 1 | | | | | | | | 3 |
| 愛　知 | 2 | 2 | 3 | | 2 | | | | | | 9 |
| 三　重 | 2 | | 2 | | 1 | | | | | | 5 |
| 新　潟 | 5 | 4 | | 4 | 4 | 1 | | | | | 18 |
| 富　山 | 27 | 11 | 14 | 3 | 23 | 2 | | | 2 | 1 | 83 |
| 福　井 | 20 | 7 | 7 | | 12 | 1 | 1 | 3 | | 1 | 52 |
| 長　野 | 5 | 1 | | 2 | 1 | | | | | | 9 |
| 京　都 | 10 | 4 | | 1 | 4 | | | 1 | | | 20 |
| 大　阪 | 9 | | 2 | 1 | 8 | | | | | | 20 |
| 兵　庫 | 3 | 2 | 5 | 1 | 1 | | 1 | | | | 13 |
| 奈　良 | | 1 | 1 | | 1 | | | | | | 3 |
| 和歌山 | 2 | | | 1 | 1 | | | | | | 4 |
| 鳥　取 | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| 島　根 | 3 | | | | 1 | | | | | | 4 |
| 岡　山 | 1 | | 1 | | | | | | | | 2 |
| 徳　島 | 1 | | 1 | | | | | | | | 2 |
| 香　川 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 高　知 | | | 1 | | 1 | | | | | | 2 |
| 長　崎 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 大　分 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 宮　崎 | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 朝　鮮 | 1 | | 2 | | 2 | | | | | | 5 |
| 合　計 | 255 | 87 | 58 | 40 | 134 | 46 | 45 | 69 | 65 | 17 | 816 |

## （2）進学適性検査

進学適性とは、上級学校において諸課程を履修するために必要な知的能力を有していることをいい、この能力には大学の学習を可能にする学力があることに加えて、入学後に期待される学習への可能性、能力があるかどうかということの両面が含まれる。

1947年度から旧制高等専門学校入試に係る官立学校志願者のための大学入学者選抜試験の筆記試験の一部の知能検査として、各校入試期日の第１日目（1948年度は各校入試とは別個に２月10日に、その後その成績を受験校の選択にいかしめるため、実施時期は次

第に早められた。）に実施され、受験者は居住する各都道府県内の官立高等専門学校において受験した。名称は、1948年度から「進学適性検査」となり、1949（昭和24）年新制大学第１回の入学者選抜から大学受験生全員に課せられた。

問題は文部省が作成し、各都道府県ごとに国立大学を中心に構成された進学適性検査監理委員会が実施し、内容が改善されてはきたものの原則として集団知能検査に類するものとして行われ、国立大学においては本学（理学部）も含めて、進学適性検査を点数化している。

なお、志願者が一定の人数や倍率を超えた際には、進学適性検査の成績を第一段選抜（いわゆる足切り）の資料として活用することを予告していた大学は国公立15大学であった。

当初、米軍指令部からの勧告を受けて実施されたこの検査は、練習効果が顕著にでること、そのための準備が激しくなり、学力検査との二重の負担となったこと、大学の利用が積極的でなかったこと、予算が十分でなかったこと、国立大学協会（以下、国大協という）・全国高等学校長協会などから中止の要望が出されたことなどの理由で、1955年度から一斉実施は廃止された。

## ２　1978年度以前の入試

### （1）能研テスト

中央教育審議会の答申「大学教育の改善について」（1963年１月28日）の「大学の入学試験について」に基づき、学習到達度と進学適性について客観的検査方法を調査研究するとともに、その方法により共通的・客観的テストを実施する機関として、1963（昭和38）年１月に財団法人能力開発研究所が設置され、同年４月から業務を開始した。

能力開発研究所では、この目的に沿って1963年から、①学力テスト（国語・社会・数学・理科および外国語の５教科17科目について、身についた学力を測定）、②進学適性能力テスト（進学適性として必要な知的能力のうち言語的推理能力と非言語的推理能力を測定）、③職業適応能力テスト（職業適応に必要な知的能力のうち一般能力と基礎学力を測定）を実施したが、これらを総称して「能研テスト」といわれた。

文部省は、1967年度から、このテストの結果を大学入学者選抜の資料として利用できることとし、その利用と研究成果の普及に努めたが、大学側の対応が極めて消極的であったことなどにより、受験者数が減少の一途をたどり、1969年度から廃止された。

## （２）Ⅰ期校・Ⅱ期校の区分

新制国立大学の入学者選抜については、国立大学をⅠ期校とⅡ期校の２グループに分け、1949年度だけは、国立学校設置法が５月31日に公布された関係で、Ⅰ期校は６月８日から、Ⅱ期校は６月15日から、翌年度からはⅠ期校は３月初旬に、Ⅱ期校は３月下旬に設定され、一斉に実施された。この方式は、1978年度まで続けられ、共通一次学力試験による入学者選抜が実施（1979年１月13日（土）・14日（日）、全国225会場、約322,000名受験）された1979年度から廃止された。

どの大学をⅠ期校とするか、Ⅱ期校とするかは文部省の大学入学者選抜実施要項の別表（表11－４）で定められ、30年間ほぼ固定されていた。このことから、大学の区分としてⅠ期校・Ⅱ期校の呼称が生まれた。

このⅠ期校・Ⅱ期校の区分については、①法学部をはじめとして、文・教育・理・医・薬・歯学部において、著しく偏っている、②地域的にも不均衡、③Ⅱ期校における出願者数に対する実受験者の割合が極めて低い上、入学辞退者も多い、④国立大学間の格差を示すような社会的通念が定着化した、⑤高等学校においてⅠ期校への進学率の優劣をもって学校が評価される傾向など、多くの問題点が指摘されてきた。このため国大協において、共通一次学力試験の実施についての検討と併せてその改善について検討された結果、Ⅰ期校・Ⅱ期校の区分は、これを廃止することとなった。

その経緯としては、国大協の常任理事会（1965年10月25日）において第７常置委員会および第４特別委員会の各審議担当事項が決定され、第２常置委員会で「Ⅰ期校・Ⅱ期校区分」を含む学科課程・入試等を担当することとされた。第35回総会（1965年11月26日）において、区分の可否等が検討された。

第２常置委員会はアンケート結果を集計・分析し、次のとおり第38回総会（1966年11月30日）で改善案を提示した。

入試期日は、①社会一般におよぼす影響を考慮して３年ないし５年間は同一期日とし、変更の場合は実施２年以内にその期日を公表、②国立大学以外の大学との関係を考慮し一定の入試期間を設けてそのなかで行うとし、二通りの入試期日の決定方法を提示した。一つは「同一地域の国立大学間又は専門領域を同じくする国立大学間で充分協議の上、決定しうる」こと、もう一つは「期間内に実施すべき期日を前後二通りとし、同一地域の国立大学間又は専門領域を同じくする国立大学間で充分協議の上、いずれかを決定しうる」こと。

この区分問題は、どのような形で改善するのかについて意見が分かれ、総会において統一的な結論は得られなかった。

その後、1968年４月までに「国立大学の入学試験期日の決定方法について」などの２回のアンケートが実施され、国立大学の入試を前期および後期の２期に分けて行う方式が決定し、各大学がいずれの期に入試を行うかについては、国大協の特別委員会でとりまとめる内容となり、８月８日の理事会で「入試期特別委員会」を発足させることが決定され

た。９月12日に開催された第１回の会合において、前期入試・後期入試との２回試験方式を前提に、具体的な検討を進めることとなり、一本化へ向かっていった。

表１１－４　入学者選抜実施要項（昭和24年3月24日付発学第177号）
（別表一）

| 第Ⅰ期 | | | | 第Ⅱ期 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学名 | 学部 | 大学名 | 学部 | 大学名 | 学部 | 大学名 | 学部 |
| 東北大学 | | 大阪外国語大学 | | 山形大学 | | 京都工芸繊維大学 | |
| 岩手大学 | | 奈良学芸大学 | | 福島大学 | | 奈良女子大学 | |
| 東京大学 | | 大阪大学 | | 弘前大学 | | 大阪学芸大学 | |
| 東京農工大学 | | 島根大学 | | 東京文理大学 | | 神戸大学 | |
| 東京芸術大学 | | 岡山大学 | | 一橋大学 | | 和歌山大学 | |
| 東京学芸大学 | | 山口大学 | | 東京工業大学 | | 鳥取大学 | |
| 電気通信大学 | | 徳島大学 | | お茶の水女子大学 | | 広島大学 | |
| 群馬大学 | | 高知大学 | | 茨城大学 | | 香川大学 | |
| 埼玉大学 | | 九州大学 | | 宇都宮大学 | | 愛媛大学 | |
| 横浜大学 | | 福岡学芸大学 | | 千葉大学 | | 北九州工業大学 | |
| 新潟大学 | | 長崎大学 | | 東京外国語大学 | | 佐賀大学 | |
| 信州大学 | | 宮崎大学 | | 富山大学 | | 熊本大学 | |
| 福井大学 | | 北海道大学 | | 金沢大学 | | 大分大学 | |
| 名古屋大学 | | | | 山梨大学 | | 鹿児島大学 | |
| 愛知学芸大学 | | | | 静岡大学 | | 室蘭工業大学 | |
| 三重大学 | | | | 愛知工業大学 | | 帯広畜産大学 | |
| 京都大学 | | | | 岐阜大学 | | 小樽商科大学 | |
| 京都学芸大学 | | | | 滋賀大学 | | 北海道学芸大学 | |
| 計31校 | | | | 計36校 | | | |

# 3　共通一次学力試験（1979年度開始）以降の入試

## （1）入試期日の一本化

国大協は入試期特別委員会の一時休会後、第２常置委員会において入試制度全般を検討することとなり、大学入試問題に関しての高等学校側との懇談会（1969年10月）に基づく高等学校側の要望「入試の際の調査書の重視、全国的統一スケールあるいは地方化したスケールを設けた成績判定など」を踏まえて、第54回総会（1969年11月25日）「入学試験制度改善に関するアンケート」を各大学に依頼した。その後、「共通テスト」問題が検討され、統一テスト（高等学校側主体・大学側主体・大学と高校の協力体制・独立した他機関によるなどの方法）か共通一次入試かが諮られた。

文部省は「大学入学者選抜方法の改善会議」（1970年７月）に大学入試の抜本的改革に

ついて諮問し、同会議（同年12月）は「中間発表」で共通一次試験構想を明らかにしている。

国大協は理事会（1971年２月19日）において、入試調査特別委員会設置を決め、９月に「全国共通一次試験に関するまとめ」を公表した。なお、中教審は同年６月１日に第22回答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」を発し、「大学入学者選抜制度の改善の方向」で、調査書の重視と共通テストの導入を提言している。文部省は1973年度予算で共通一次試験の実験実施を決定し、国大協に委嘱した。

また、入試改善調査委員会を設置（1973年４月）し、共通一次試験実施に向けた検討を行った。

公立大学協会（以下、公大協という）も関心を示しており、国大協理事会（1974年11月11日）で共通一次試験への参加を希望していることが報告された。

国大協および公大協の意向を受けて、国立学校設置法の一部改正（1977年５月２日法律第29号）により大学入試センターが設置され、共通一次試験の問題作成・採点などの業務を担当するとともに、大学の入学者選抜方法の改善に関する調査研究をも行うこととなった。

国大協においては、1979年度の入学者選抜から各大学が実施する第２次試験の期日を一本化することとなった。よって受験者は、国立大学を１校しか受験できなくなったことが不満となり、1987年度から導入された受験機会の複数化へ向けての議論につながっていった。

## （2）受験機会の複数化

国立大学および公立大学は、1979年度以来共通一次学力試験を利用した入学者選抜を実施してきたが、共通一次学力試験での良問の確保、各大学の入試改善の推進など、評価される反面、①共通一次学力試験の成績による大学の序列化や、いわゆる輪切りによる進路指導により「入りたい大学」より「入れる大学」を受験する傾向があること、②共通一次学力試験と同時に国公立大学の受験機会が一元化したことに対する不満があること、③各大学の第２次試験の多様化がなお不十分であることなどの批判があり、国大協を中心にこれらの状況の打開のため1983年度以来改善の検討が進められた。

この結果、各国立大学・学部をＡ・Ｂの２グループに、公立大学・学部をＡ・Ｂ・Ｃの３グループに分け、Ａ・Ｂ・Ｃの順で試験期日を設定して入学者選抜を実施し、受験者は、２校（公立大学のグループを含むと３校）を受験できるようにした。そして、合格者は合格した大学のいずれかを合格後に自由に選んで入学手続きをすることができることとなった。これは受験生の負担軽減を図りつつ従来１回に限定されていた受験機会を複数化することにより、合格可能性優先ではなく「入れる大学」より「入りたい大学」へのチャレンジをより可能にし、受験生の選択の機会の拡大を目指したものである。

しかし、この制度による1987年度の入学者選抜が実施されたところ、大学・受験生側

の双方が不慣れであったこともあり、２段階選抜（いわゆる足切り）で大量の不合格者が出たこと、また大学によっては大量の入学辞退者が出て入学者決定業務がかなり煩雑化し、大学当局においても、受験者および社会一般からも問題が指摘された。

このため、国大協を中心にさらに検討された結果、1989年度から、1987年度の方式（以降「連続方式」と呼ばれている。）のほか、一つの大学が定員を分割して、前期と後期に分けて入学者選抜を実施し、前期に合格した者で、入学手続きをした者は後期を受験できないこととする方式（以降「分離・分割方式」と呼ばれている。）を併用することとなった。

金沢大学においては、1987年度から文学部・教育学部・法学部・経済学部・理学部・医学部・薬学部・工学部がＡ日程（連続方式）で実施され、分離・分割方式へは90年度から理学部・薬学部・工学部が、91年度から経済学部が、92年度から医学部が、94年度から法学部が、97年度から文学部・教育学部がそれぞれ移行して、全学において分離・分割方式が採用され、受験機会の複数化の要請に応えることとなった。

分離・分割方式における前期日程・後期日程の募集人員については、各学部の特性・地域的均衡・社会情勢等を考慮しながら適正化を図り、勉学意欲の高い優秀な学生の確保に努力している。

## （３）入学試験場借用の諸事情

### 金沢大学入学者選抜試験に係る入学試験場の借用について

「昭和62年度金沢大学入学者選抜試験に係る入学試験場の借用について」（石川県教育委員会教育長あて、金沢大学長本陣良平名：昭和61年８月６日付金大入第53号）は、次のように本学の事情を述べた上で、その協力方を依頼している。

昭和62年度の金沢大学入学者選抜試験につきましては、国立大学の受験機会が複数化されたことに伴い、入学志願者数は従来に比べ大幅に増加するものと予想しています。

本学としましては、この度の複数化の趣旨に即して、入学志願者が実質的に二つの国立大学を受験できるようにするため、昭和62年度入学者選抜試験においては、２段階選抜は行わない旨決定し、公表しました。また、志願者数の大幅増の問題につきましては、学内の施設を精査し、7,100人（入学定員1,645人の約4.3倍）の入学試験場を設置することができる見通しを立てました。

つきましては、このような本学の現状を御賢察願い、入学志願者が著しく増加して、学内のみでは入学試験場を確保できない事情が生じました場合は、貴管下の下記の高等学校施設を借用し、入学者選抜試験を万全かつ円滑に実施したいと考えておりますので、何分の御高配を賜りますようお願いします。

なお、当面、入試志願者数は、8,500人程度と想定し、貴委員会事務局関係課と当学生

部との間で予備的な連絡を行い、下記４校の借用方につき、御内意を得て準備を進めておりますが、それぞれ使用する学部・学科、人数等の細目は、入学志願者が確定次第、改めて協議いたしたく、併せてよろしく御配慮くださいますようお願いします。

記

金沢泉丘高等学校
金沢二水高等学校
金沢桜丘高等学校
金沢錦丘高等学校

〔備　考〕

入学者選抜試験関係の主な日程は、以下のとおりです。

入学者選抜試験関係の主な日程

1　入学願書受付
昭和62年１月12日（月）～
昭和62年１月19日（月）

2　入学志願者数の確定（予定）
昭和62年１月20日（火）

3　試験場設営及び志願者の試験場下見
昭和62年２月28日（土）

4　試　験　実　施　期　日
昭和62年３月１日（日）

1987年度の入試志願者数の確定後、次のように入学試験場の借用について依頼文書を発信している。

「昭和62年度金沢大学入学者選抜試験に係る入学試験場の借用について」（石川県教育委員会教育長あて、金沢大学長本陣良平名：昭和62年２月７日付金大入第８号）

本学の昭和62年度入学志願者は、受験機会の複数化に伴い著しく増加し、9,661人に達しました。

このような状況にかんがみ、試験場につきましては、可能な限り学内施設を充てることに留意するとともに、受験者は学部又は学科の単位以下に分割することを避け、公平な条件のもとで受験できるように配慮して試験場計画を設定しました。

つきましては、かねてお願いしておりましたところでありますが、学内施設における受験者6,880人を超える2,781人の試験場として貴管下の下記３高等学校を借用して昭和62年度の本学入学者選抜試験を実施いたしたく、格別の御配慮を賜りますようお願い申し上げます。

なお、借用予定の各高等学校長あてに別途学校施設使用許可の手続を行います。

記

金沢泉丘高等学校

工学部（土木建設工学科・物質化学工学科）試験場

受験者数　1,287人

金沢二水高等学校

文学部（文学科）試験場

受験者数　　406人

金沢錦丘高等学校

法学部（法学科）試験場

受験者数　1,088人

## 文部省との交信

「昭和62年度の第２次試験の実施に係る外部試験場の借用数について」（各国立大学入試担当課長あて、文部省高等教育局大学課大学入試室発信：昭和62年１月14日付事務連絡）は、次のようである。

このことについて、１月19日の第２次試験出願締切後の状況を勘案して第２次試験の実施に係る外部試験場の借用数について、１月20日（火）中に別紙の様式により作成し、電話ファックスにより大学課大学入試室あて報告ください。

なお、１月20日までに確定しない場合は、その旨お知らせいただくとともに、報告可能な

期限についてもお知らせ下さい。
大学課大学入試室　企画係

本学からは、次のように報告している。
「昭和62年度の第２次試験の実施に係る外部試験場の借用数について」（文部省高等教育局大学課大学入試室あて、金沢大学入学主幹名：昭和62年２月３日付事務連絡）

昭和62年１月24日付で連絡のありましたこのことについて、未定部分が確定しましたので、別紙のとおり報告します。
（「別紙」報告内容には、文学部・法学部・工学部が各石川県立高等学校を借用すること。暖房費及び除雪費を予定している旨を記載。）

［昭和63年度以降における石川県内高等学校の借用について］
１　昭和63年度
２段階選抜を行わない旨を決定し、前年度と同様にＡ日程グループで実施することを公表した。昭和63年度は本学が80名程度の増員を計画しており、一部大学の文系学部がＢ日程グループに移行し、本学の入学志願者数が前年度に比べより以上の大幅増（想定入学志願者数12,000人程度）が見込まれるため、借用施設を増やさざるを得ない状況となった。
借用予定高等学校施設：金沢泉丘高等学校・金沢二水高等学校・金沢桜丘高等学校・金沢錦丘高等学校・金沢女子高等学校・金沢西高等学校
昭和63年度入学志願確定数：8,221人
昭和63年度確定試験場：金沢錦丘高等学校（法学部）
金沢桜丘高等学校（経済学部）
金沢泉丘高等学校（工学部）

２　平成元年度
２段階選抜を行わない旨を決定し、前年度と同様にＡ日程グループで実施することを公表した。平成元年度は西日本地区の一部大学が分離・分割方式で実施するため、本学の入学志願者数が前年度に比べより以上の大幅増（想定入学志願者数12,000人程度）が見込まれるため、借用施設を増やさざるを得ない状況となった。
借用予定高等学校施設：金沢泉丘高等学校・金沢二水高等学校・金沢桜丘高等学校・金沢錦丘高等学校・金沢女子高等学校・金沢西高等学校
平成元年度入学志願確定数：7,457人
平成元年度確定試験場：金沢泉丘高等学校（工学部土木建設工学科・物質化学工学科）
金沢錦丘高等学校（法学部法学科）

３　平成２年度

国立大学入学試験は受験機会の複数化３年目を迎え、本学においても３学部が分離・分割方式を採用することとなり、入学試験場は相変わらず不自由な状態（想定入学志願者数10,000人程度）が見込まれるため、高等学校施設を借用せざるを得ない状況と判断した。

借用予定高等学校施設： 金沢泉丘高等学校・金沢二水高等学校・金沢錦丘高等学校

平成２年度入学志願確定数： 5,338人

石川県教育委員会教育長及び借用予定高等学校長あて借用辞退を申し入れた。

４　平成３年度

平成２年度と同様の状況（想定入学志願者数10,000人程度）が見込まれるため、高等学校施設を借用せざるを得ない状況と判断した。

借用予定高等学校施設： 金沢泉丘高等学校・金沢錦丘高等学校

平成３年度入学志願確定数： 5,143人

石川県教育委員会教育長及び借用予定高等学校長あて借用辞退を申し入れた。

５　平成４年度

国立大学入学試験は受験機会の複数化５年目を迎え、分離・分割方式がますますすすみ、本学においても５学部が分離・分割方式を採用することとなり、入学試験場は相変わらず不自由（想定入学志願者数10,000人程度）な状態が見込まれるため、高等学校施設を借用せざるを得ない状況と判断した。

借用予定高等学校施設： 金沢泉丘高等学校・金沢錦丘高等学校

平成４年度入学志願確定数： 4,303人

石川県教育委員会教育長及び借用予定高等学校長あて借用辞退を申し入れた。

平成５年度から、本学の入学者選抜試験に係る入学試験場として、石川県内高等学校の借用（人的を含めて）はない。

以降に、高等学校借用に係る諸事項についての対応等を記す。

**学校施設使用許可申請および施設使用許可について**

石川県教育委員会教育長あて本学学長名で依頼文書の発信を踏まえて、対象の高等学校長あて「学校施設使用許可申請書」を、使用財産・使用目的・使用期間・添付書類（平面図）・備考（使用人員：金沢大学職員および入学志願者）を記載し、学長名で発信している。

申請に基づく「施設使用許可書」が各高等学校長から発信され、使用財産の表示・使用目的・使用期間・使用料・使用条件が記載されている。

なお、使用料は石川県行政財産使用料条例（昭和39年石川県条例第８号）第６条第２号

の規定により免除された。

　また、使用条件にあっては「使用者はその非に帰すべき理由により使用財産を滅失又はき損したときは、その損害額を補償し、または原状に復するものとする。」等が記されている。

### 試験場準備における諸留意事項について

　本学から離れて、試験場を設営するに当たって、種々の配慮が考えられたが、その主な事項は、次のようなものであった。

○校舎の入り口を、教職員と受験者を別とできないか。
○駐車場における駐車可能台数を確認の上、実施委員・監督員・事務官等以外の受験者や父兄等の入構禁止措置が必要であること。
○大学直通電話および電話ファクスを設置すること。
○複写機は、高等学校で設置のものを借用できないか。
○父兄控室は、試験室と隣接しないこと。
○窓ガラスの破損・不良蛍光灯・ブラインド等の事前点検・補修および補修費用の負担。
○ボイラーマンの配置は、高等学校側にお願いしたいこと。
○補助暖房（石油ストーブ）の借用は可能か。
○多量の降雪が予想される場合の除雪依頼について。
○校内放送・チャイム・ベルを確認のこと。
○停電に備えての「振鈴」の借用を確認のこと。
○湯沸かし室（電気・ポット・ヤカン等の借用を含む。）の使用を確認のこと。
○清掃用具の借用を確認のこと。
○校舎の下見・事前打合せ実施のこと。
○高等学校生徒の部活動の自粛協力方依頼のこと。
○「試験案内」掲示板設置に伴う、立入り禁止のための配置人員のこと。
○外部からの問い合わせ（高等学校を含む。）対応の配置人員のこと。
○金沢大学職員の泊り込みが可能か確認のこと。（夜間緊急時の連絡方法等の確認を含む。）
○受験者の喫煙場所の設置のこと。

校門の警備について

　借用先の各高等学校における、校門の警備については、

○7:20～8:00・8:00～8:30・8:30～9:00　１名
○9:00～16:00までの１時間間隔　各１名
○16:00～16:30　１名（二水高等学校のみ12:10試験終了。）

試験室前廊下の立番

○金沢二水高等学校＝事務局庶務部職員
○金沢錦丘高等学校＝教養部職員
○金沢泉丘高等学校＝事務職員

バス案内

○金沢駅前バスターミナル始発北陸鉄道バスの「路線番号及び下車」案内は次のとおり。

| | | |
|---|---|---|
| ○金沢二水高等学校 | 20（平和町行） | 十一屋 |
| ○金沢泉丘高等学校 | 31（額住宅駅行） | 泉丘高校前 |
| | 32（工業大学前行） | 泉丘高校前 |
| ○金沢錦丘高等学校 | 32（工業大学前行） | 錦丘高校前 |

## （4）金沢大学の２段階選抜

本学の２段階選抜は、1990～95年度までの間において、その予告を各年度「学生募集要項」の入学者選抜方法欄に次のように掲載している。

平成２年度：２段階選抜

①次の学部の学科では、志願者数が募集人員の下記倍数を超えた場合に、主として、調査書の内容とセンター試験の成績により第１段階選抜を行うことがある。

この場合、その合格者について個別学力検査等を行う。

理学部（数学科・生物学科・地学科）　10倍

工学部（全学科）　８倍

②第１段階選抜の合格者発表

1990（平成２）年２月17日（土）

ア　第１段階選抜を実施しない場合

実施しない旨を、該当学部において掲示発表するとともに、志願者全員に受験票を送付する。

イ　第１段階選抜を実施した場合

合格者の受験番号（入学検定料領収証書の氏名欄に記入されているもの）を、該当学部において掲示発表するとともに、合格者には合格通知及び受験票を、不合格者には不合格通知及び入学検定料の一部返還申請書等を送付する。

平成３年度：２段階選抜

対象学部・学科：

経済学部（経済学科）　８倍

理学部（数学科・生物学科・地学科）　10倍

工学部（全学科）　８倍

平成４年度：２段階選抜

対象学部・学科：

| | |
|---|---|
| 経済学部（経済学科） | 10倍 |
| 理学部（数学科・生物学科・地学科） | 10倍 |
| 医学部（医学科） | 10倍 |
| 工学部（全学科） | ８倍 |

なお、1992年度にあっては、「２段階選抜について」（２段階選抜を予告している各国公立大学―短期大学を除く―長あて、文部省高等教育局長名：平成４年１月28日付文高大第77号）の次の通知があった。本学では予告倍率を下回った学部も含め、対象４学部において「第１段階選抜を実施しない」旨を発表した。

２段階選抜について（通知）

このことについては、既に平成４年度大学入学者選抜実施要項において、「入学志願者の数が入学定員を大幅に上回り、個別学力検査等を適切に実施することが極めて困難であるため特に必要がある場合以外には行わないものとする」こととされているところであります。

貴大学においても、この趣旨に基づき、下記の点に御留意の上、格段の御配慮をお願い申し上げます。

記

入学志願者が募集要項で予告した２段階選抜の倍率を上回っている場合においても、試験会場、採点能力等について十分な検討を行い、改めて、実施するかどうかについて検討するとともに、実施する場合にあっても、可能な限り当該倍率の緩和について努力すること。

平成５年度：２段階選抜

対象学部・学科

| | |
|---|---|
| 医学部（医学科） | 10倍 |
| 工学部（全学科） | ８倍 |

平成６年度：２段階選抜

対象学部・学科

| | |
|---|---|
| 医学部（医学科） | 10倍 |
| 工学部（全学科） | ８倍 |

平成７年度：２段階選抜

対象学部・学科

| | |
|---|---|
| 医学部（医学科） | 10倍 |
| 工学部（全学科） | ８倍 |

## （５）大学入試センター試験

大学入試センター試験は大学入学志願者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的として、各大学が大学入試センターと協力して同一の期日に同一の試験問題により共同して実施するものである。各国公私立大学がそれぞれの創意工夫に基づき、この試験を適切に利用することによって受験生の能力・適性などを多面的に判断する資料となることを目指している（大学入試センター実施要項）。

1979年度入学者選抜から実施された共通一次学力試験は、難問・奇問がなくなり、高等学校教育に沿った出題がなされるようになったことなどの評価を得たが、一方、共通一次学力試験が一律に５教科５科目利用とされていたことなどにより、大学の序列化が顕在化し、また、国公立大学のみの入試改善にとどまるなどの問題が指摘されるようになり、臨時教育審議会（1985年６月答申）は、この弊害是正の観点から、受験生の個性・能力・適性等の多面的な判定や、国公立大学のみならず、私立も含めた各大学の選抜方法の改善に積極的に寄与するものとして、共通一次学力試験に代わる新しいテストの創設を提言した。

この提言を受け、文部省の大学入試改革協議会において具体案が検討され、1988年２月の最終報告「大学入試改革について」に基づき実施準備が進められ、1990（平成２）年１月に第１回の大学入試センター試験が実施された。

この試験は共通一次学力試験とは異なり、国公私立のすべての大学が利用することができ、その成績の利用方法も各大学の自由であるところに特色がある。

1992年度の大学入試センター試験利用大学は、国公立大学は全大学・学部、私立大学は32大学46学部で、私立大学の利用が次第に増加している。新たにこの試験を利用した大学からは、オールラウンド型など従来とは異なるタイプの学生が入学するなど学生の多様化が図れたこと、受験生が全国的に広がり、増加した、などの反響が寄せられている。

なお、2000年度志願者実績数は581,958人であり、2001年度志願者数はさらに上回るものとみられている。

## （6）特別選抜の実施

1979年度から共通一次学力試験が導入されて以降は、各大学の入試の改善が推進されることとなり、受験機会の複数化により受験生の選択機会が拡大されるなど、検討と改善が重ねられる状況となった。

本学においても選抜方法についての検討がなされ、一般選抜とはその選抜方法を異にする能力・適性・意欲等を評価する特別選抜（推薦入学・帰国子女選抜）、私費外国人留学生選抜、３年次編入学を実施してきた。

### 推薦入学

学校長の推薦に基づき学力検査を免除し、調査書を主な資料として、多様な人材の選抜との観点から小論文・面接等を実施している。

本学では、教育学部（学校教育教員養成課程技術教育・美術教育コース、スポーツ科学課程：1985年度～）、経済学部（経済学科：1985年度～）、工学部（土木建設工学科、機能機械工学科、物質化学工学科、人間・機械工学科、電気情報工学科：1991年度～、電気電子システム工学科・情報システム工学科：2000年度～）がそれぞれ選抜している。

近年では、2000年度からは薬学部（薬学科、製薬化学科）、2001年度からは法学部（法学科、公共システム学科）および医学部保健学科（看護学専攻、放射線技術科学専攻）において選抜が実施される。

### 帰国子女特別選抜（1992年～）

海外において教育を受け、帰国した者を対象に外国の教育事情を考慮して学力検査を免除し、提出書類・小論文・面接により選抜している。

本学では、文学部（人間学科、史学科、文学科：1992年度～）、法学部（法学科、公共システム学科：2000年度から推薦入学に含める）、理学部（数学科、物理学科、化学科、生物学科、地球学科、計算科学科：1992年度～）、医学部（医学科、保健学科：1993年度～）、薬学部（薬学科、製薬化学科：1992年度～）、工学部（土木建設工学科、機能機械工学科、物質化学工学科、人間・機械工学科、電気情報工学科：1994年度～、電気電子システム工学科、情報システム工学科：2000年度～）がそれぞれ選抜を実施している。

### ３年次編入学（1977年～）

高等専門学校・短期大学・大学を卒業した者などを対象として選抜し、３年次への編入学を認めるものである。

本学では、工学部（1977年度～）、法学部（1995年度～）、理学部（1997年度～）、医学部（保健学科：1998年度～）がそれぞれ実施している。

**私費外国人留学生選抜（1979年～）**

日本国籍を有しないで、外国において教育を受けた者を対象に、私費外国人留学生統一試験（日本国際教育協会主催）および日本語能力試験（日本国際教育協会・国際交流基金共催）並びに学力検査・提出書類・面接により選抜している。

本学では、1979年度から各学部・学科（課程）などにおいて実施している。

## （7）金沢大学入学者選抜試験に係る打合会の開催について

1988（昭和63）年２月29日（月）には、入学試験の実施に先立ち、入学試験場の借用を引き受けていただいている関係者の、石川県教育委員会教育長・庶務課長・各高等学校長（金沢泉丘・金沢二水・金沢桜丘・金沢錦丘・金沢西・金沢女子）、本学から本陣良平学長、野中俊彦法学部長、藤田暁男経済学部長、柴原正雄工学部長、佐々木吉男学生部長、忠軍治学生部次長、清水武夫入学主幹が出席して、国立大学の受験機会の複数化に伴う本学入学者選抜試験の受験者数の著しい増加問題等、入学者選抜試験全般にわたり打合せが実施された。

この打合せは、翌年度も1989年３月１日（水）に実施された。

## （8）入試事務電算処理の推移

入学試験電算処理の沿革について以下に記す。

**1974（昭和49）年**　入学試験事務の電算化に向け、実務を経験するために特例として計算機センターの教官１名が総務委員となり、1975年度入学試験の実務を行う。

**1975年**　入学試験事務電算処理の試行を行うことに決定する。言語はFORTRANを用いる。理学部のみを試行する。処理は合格判定表作成のための集計と印刷を行う。データ作成は業者によるパンチャー派遣までまかなう。

**1976年**　全学の本格的な処理の実施を開始する。これにより、事務の集計作業および総務委員の合格判定資料の作成業務がなくなった。

**1977年**　共通一次学力試験（試行テスト）が実施される。共通一次学力試験開始にあたり、センター職員とボランティアによる教官で構成される入学試験事務電子計算機処理委員会が発足する。これは、入学試験の機械化を１人の人間で行うことは非常に危険であるため（事故や病気等への対策）の措置である。共通一次学力試験の開始による処理の複雑さから、プログラムの開発などで１人あたり数百時間を要する。

**1979年**　共通一次学力試験（本試験）が開始される。

**1986年**　連続方式（Ａ日程・Ｂ日程）が開始される。また、データＭＰ総受信が一部ONLINE化される。このころから非常に精力的な教官が加わり、発表リストの作成・入学資料の作成等、数年をかけて電算化される。

**1989（平成元）年**　今年の入学者から分離・分割方式が可能となる。当大学も1990年度入学生から、多くの学科で分離・分割方式が開始される。このためプログラム開発の作業は数百時間に達した。このころから教官の労力の問題および処理方式の問題が話題となり始める。

**1990年**　大学入試センター試験が開始される。

**1991年**　ボランティアの教官が得難くなり、委員会の構成メンバーの全学部から各１名ずつ選出することになる。この年度に経済学部が群別選抜を開始するのに伴い、合格判定資料変更のためのプログラム改訂が行われる。

**1992年**　事務官による操作を一部開始する。委員の労力軽減を図るための操作等の改善を行う。

**1993年**　誰もが入学試験処理に携われるように、入学試験処理プログラム使用手引き書を作成する。

**1999年**　現在使用している総合情報処理センターの汎用コンピュータの2001年度撤去を踏まえ、新システム用サーバーおよび周辺機器を購入する。

**2000年**　2001年度入試（試行）を目指し、新システムプログラム作成を業者に委託し、入試課の監修により複雑・多様化した入学者選抜、入試情報開示、一元化される入試に対応すべく精力的に取り組んでいる。

# ４　大学紹介・広報の時代

情報提供の質の向上・普及・啓蒙の推進（優秀な学生の確保）など、昨今の大学入学広報にあっては、従来の大学紹介・案内・交流等に加えて、高等学校自体の多様化（普通科・職業学科・総合学科）・弾力化を視野に入れての、高等学校と大学の接続に関する問題などが論じられ、さらに今後の広報は、高校生が真に求める情報提供と価格（検定料・授業料等）と教育内容の充実を抜きには意味を持たないとも言われている。

本学では、大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」に対応して、「金沢大学の基本理念・目標」を策定し、その実現を目指して大学づくりを進めることとしている。

## （1）見学会

高校生等への見学会・説明会は、当初一部の学部において各学部単位に開催していたが、1998年度から、本学への進学意欲を向上させることを目的に、全学的な「大学見学会」（角間キャンパスのみ）を北陸３県の高校２年生を主対象に開催した。1999年度からは角

間キャンパス以外の学部も加わり、全学を挙げての「大学見学会」として開催し、高校生の進路選択のために必要な情報および資料を提供し、「金沢大学で何を学べるか」、「金沢大学の魅力」等を紹介している。

1998年度に実施した大学見学会は、文学部・教育学部・法学部・経済学部・理学部の５学部により開催し、参加者は638人であった。

1999年度に実施した大学見学会は、文学部・教育学部・法学部・経済学部・理学部・医学部（保健学科）・薬学部・工学部の８学部により開催し、参加者は1,358人であり、北陸３県以外からも200人ほどの参加があった。

内容としては、全体説明会（午前中：角間キャンパス内）・各学部見学会（午後：各学部内）に分け、全体説明会では文系会場と理系会場に区分し、大学概要の説明、入学試験の概要の説明、各学部の特色の紹介、附属図書館の自由見学を、各学部見学会では、学部概要の説明、学科・課程の説明、模擬授業、施設見学などを実施した。

2000年度に実施した大学見学会は、参加学部は前年度と同様であり、参加者は1,500人であった。内容としては、全体説明会を３キャンパス４会場（第１会場：文学部・法学部・経済学部Ａ101講義室、第２会場：教育学部402講義室、第３会場：医学部十全講堂、第４会場：工学部秀峯会館）とし、本学の創立50周年広報ビデオ「金沢大学の過去・現在・未来」を各会場において放映した以外は、前年度と同様に実施した。

開催時期については、高等学校における補習授業の事情など、石川県教育委員会および県内高等学校長会の意向を考慮し、８月上旬に開催している。

また、本学では各高等学校からの要請により、学校単位（保護者を含む。）の見学についても随時受け入れており、金沢大学の施設見学・概要説明に加えて、授業・研究室見学も可能な範囲で実施している。

## （２）学部主催の見学会等

各学部においては、金沢大学見学会に連動、高等学校などからの要請を受けて、又は積極的に当該学部における見学会を実施、又は県教育委員会・各高等学校・学会関係との協力体制の下での催しなどに対応している。

文 学 部――高等学校からの要請により、随時に対応している。

教育学部――「金沢大学見学会」に連動して開催

法 学 部――「金沢大学見学会」に連動して開催

経済学部――「金沢大学見学会」に連動して開催

理 学 部――「理学部見学会」を1993年度から継続して実施している。地域に定着し、1999年度からは学生主導による「運営委員会」が発足して自主運営に当たっている。また、高等学校単位の申込みに随時対応（公開講座を含む。）している外、生物学科や化学科の教官が高等学校に出向いての「出前講座」や一般市民を対象としたセミナーも実

施している。

医 学 部――医学科：1952年から４年に１度「医学展」を開催してきたが、1991（平成３）年を最後に中断している。（「金沢大学見学会」に連動しては「全体説明会」における「特色の紹介」に参画）

医 学 部――保健学科：1996年度以降、夏季休暇期間に「見学会」を開催している。石川県主催「高校生の１日体験」の運営指導を担当している。

薬 学 部――2000年度までの過去15回（例年、７月下旬～８月上旬）継続して、日本薬学会北陸支部主催の「１日体験入学」に参画している。

工 学 部――1999年度まで「見学会」を例年１回実施してきている。（2000年度から「金沢大学見学会」に連動して実施）

## （３）大学案内・ホームページ・テレホンサービス・ハートシステムの充実

大学案内は、毎年度本学の沿革、学部等紹介、最新の入試・進路情報や先輩の言葉・学生生活担当学部生の頁、クラブ紹介、年間スケジュール、施設紹介、組織図、国際交流、キャンパス位置図など金沢大学の最新情報を掲載している。とりわけ2001年度版では、学長からのメッセージの頁（金沢大学の基本理念・目標掲載を含む。）を冒頭に配し、７月以降に「入学者選抜に関する要項」と併せて希望する受験生に送配付するとともに、見学会に来学の高校生や保護者等にも配布される。

ホームページは近年特に全学的に充実され、「ようこそＫＵＰＩＳ（キューピーズ）へ」により、金沢大学総合案内や入学案内（合格者［受験番号］、志願者・受験者・入学者）などが紹介されている。《アドレスは、http://www.kanazawa-u.ac.jp/enter/》

テレホンサービスでは、入試状況に沿って７月上旬から「選抜要項の請求方法について」および「選抜要項の内容等について」、１月下旬から「出願状況等について」、２月上旬から「合格者発表について」および「入学手続きについて」をそれぞれ終日提供している。《電話番号は、076-264-5299》（通話は有料）

ハートシステムは、大学入試センターが進学のための大学情報を各大学から収集し、これをデータベース化することにより、個別大学の情報の入手はもとより、専門分野等によって大学間を横断的に検索し、志望する学部・学科等が全国のどの大学に設置されているかなどを即時に知ることができるシステムで、1988（昭和63）年10月からＮＴＴのキャプテン通信網を通して情報提供を行っているもので、本学からも各学部・学科・課程などの入試情報を提出し、参画している。

情報提供の内容は、「志望大学の選択」、「大学案内」、「ハート速報」、「入試案内」（大学入試センター試験の概要・国公立大学の出願状況・大学新増設・各種の統計などの情報）である。（HEART SYSTEM――Higher Education ARTiculation support system を意味する。）

## （4）北陸３県高等学校長等との入試懇談会

1979年度入学者選抜から新入試制度、特に本学が実施する第２次試験について、石川県内各高等学校長からの意見・要望を聴き今後の検討の参考とするため、石川県内各高等学校長との懇談会が、1977（昭和52）年９月17日（土）（於：事務局第１会議室）に開催され、種々の意見を交換した。

新制度による第１回目の入学者選抜試験が終わり、昭和55年度入学者選抜試験に向けて各学部などで検討を依頼している時期の、1979年４月28日（土）（於：事務局第１会議室）からは、北陸３県高等学校長との入試懇談会が開催され、本学入学試験運営委員会委員（1979年５月１日からの任期）が出席して、各高等学校長からの意見・要望を聴き、今後の入試に関する検討の参考としたことに始まり、その後、各高等学校の進路指導担当教諭を含めて開催することとなり、今日に至っている。

ここ近年における「北陸３県高等学校長等（進路指導担当教諭を含む。）と金沢大学との入試懇談会」は、例年７月下旬に開催され、1,100人を超える関係者（本学からは学長、副学長（教育担当）、入学試験運営委員会委員）が出席し、本学会議室などを会場に開催されている。

あらかじめ、質問・要望事項を確認してとりまとめ、当日には入学者選抜に関する要項・入学者選抜試験関係資料（入試状況など）・進路決定状況などを配付の上、質問・要望事項への回答および質疑応答がなされる。

冒頭、本学学長からの挨拶に続いて、石川県高等学校長会会長の挨拶の後、副学長（教育担当）（1999年度までは学生部長）から「入学者選抜に関する説明」があり、その後、質問・要望事項への回答（受験科目・選抜方法・推薦入学・入学後の問題・各学部関係事項など）および当該年度の入試の実施日程等の周知に併せて意見交換がなされ、今後の金沢大学と高等学校とのよりよい関係の構築に向けて話し合われている。

## （5）出題の解答例の公表等

1998年度から、「金沢大学入学者選抜学力検査出題意図・解答例」（前期）を、国語、地歴・公民、数学、物理、化学、生物、地学、英語の各教科について公表している。

# 5　回想・金沢大学の入学試験

## （1）鈴木寛元学生部長の回想（入試対応のあれこれ）

### 金沢刑務所での問題紙の印刷

入試問題の印刷は、1954（昭和29）年ごろまでは金沢刑務所（当時は現在の金沢美術工芸大学の場所にあった）で行われた。

問題作成委員は、印刷当日に刑務所に行き、受刑者の印刷作業を監視することになっていた。問題紙の散逸を防ぐためである。誤植の点検や枚数の確認なども所内で行われた。

作業に当たる受刑者の監視といっても、受刑者は所外に出られない身である。これに対して、受刑者を監督する監守は、勤務が終われば所外に出られる身である。したがって、可能性として考えられる問題の漏洩は、監守の手を通じて問題紙が外に持ち出されるというケースである。それ故、受刑者の印刷作業を監視するだけでなく、「監守を監視」することに重点があった。小生も１度、そのような複雑な気持ちで刑務所での１日を過ごした経験がある。

### 入試事務の電算化

1975（昭和50）年４月に小生が学生部長に就任して間もないころと記憶するが、共通一次試験が導入されることとなった。それを契機に、本学の入試事務の電算化が日程に上ってきた。従来、受験生が選択した科目の得点を集計する作業はもっぱらソロバンで処理されてきた。本学の入試事務電算化の第一弾として、このソロバンによる集計作業を電算機に切り換える案を入試運営委員会に諮ったところ、一部の委員から強い反対意見が寄せられた。そこで、試行的に従来のソロバンによる集計と電算機による集計とを併用することで了承してもらった。その結果、電算機による集計はミスがなく、ソロバンによる集計に数件のミスが判明した。

入試後の入試運営委員会にその旨を報告したところ、先に電算化に反対した委員も一転して電算化に賛成してくれた。

こうして、次年度からソロバンによる集計作業は全廃し、入試事務の電算化の突破口が開けたのである。

### 入試開始時間の繰り下げ

1977年度の入試２日目の朝は前夜来の積雪に加えてたいへんな冷えこみであった。当時、小生は城内宿舎に住んでおり、市中の道路状態は知るよしもなかった。

入試の開始時間は午前９時だったと思うが、８時ごろ、教養部の浅井正友教授から学生部長室（入試本部）に電話が入った。それによると、市中の道路はシャーベット状の積雪で、たいへんな交通渋滞とのことであった。この電話で、小生の脳裏に相当数の遅刻者のことがよぎった。と同時に入試時間の繰り下げという決断に迫られた。

早速、入試委員長の豊田学長に電話を入れたが、不在で連絡がとれない。入学主幹の百足君、入試係長の岡部君と協議し、学長には事後報告となっても、小生の全責任で開始時間を30分繰り下げることを決断した。

各試験場（宝町キャンパス・工学部キャンパスなど）に、その旨緊急連絡するとともに、NHKに開始時間30分繰り下げの報道方を要請した。その結果、全体的に若干の遅刻者はあったものの大事に至ることなく、９時30分からの試験が行われた。

かねてから入試運営に辛口の意見を寄せていた連中からも、適切な処置だったとの評価をいただいて、胸をなでおろした始末である。

## （２）1960～70年代入試の思い出

### 1960・70年代の入試　国語

金沢大学名誉教授　深井一郎

まず「国語」内の分野は「現代文・古文・漢文・作文」とし、古文と漢文とは二者択一とした。後に作文は廃止し、古文と漢文との二者択一も取り止めとなった。入試に関わったのは、法文・教育学部、教養部の国語国文と中国語の全教官であり、出題者は国文学１・国語学１・漢文学１の３名でその氏名は関係者間でも公表されなかった。採点者は法文・教育・教養の関係教官10名で行った。後には独文の教官の援助も受けた。

問題の作製については、高校の指導要領・解説書・実際に採用されていた教科書、予備校などで使用されていた参考書・問題集の主なものが用意され、これらに目を通すだけで約２カ月は費やされた。出題が特定の作品に片寄らないこと、設問のレベルが妥当であることなどが考慮されたのである。甲・乙二種類の問題文と設問が準備され、秋ごろに数回の出題委員の検討会で討議された。そこで決められた最終案が全学の委員会を経て印刷に廻された。最初のころは上鶴間町の金沢刑務所内で印刷されていたので、委員は校正のために１日刑務所入りを体験させられた。

次いで採点では、各問題・設問ごとに配点が決められ、次に出題者からその主旨と設問の正解と許容範囲が示されて意見交換が行われる。各設問に複数の採点者が配置されるのが普通であり、この間の意見交換は極めて厳密に行われた。採点は原則的に減点法で行われた。この採点のワク（許容範囲と得点のランク）を各採点者がその頭の中で、２～３日程かかって答案を無作意に検討しながら、具体的に作製するのである。途中でこのワクをはみ出る答案に出逢い、ワクの一部を変更することを余儀なくされることもあったが、そうなるとはじめからもう１度やり直しをせねばならなくなるわけである。一方、作文につ

いては長老教授３～４名が担当された。人生経験豊かな長老教授３～４名が、試みに同一答案をそれぞれ採点してみて、ワク（構想と記述力など）とランク（Ａ・Ｂ・Ｃ）を話し合うのであるが、なかなか一致しないことが多い。各自採点し、その平均値を取るということもできず、随分と神経をすりへらす作業であった。数年後に、故郷の母親への手紙という形式で書くものが現れ、以後どうして伝わったのか、この形式が急増したことが引金となって作文の出題は取り止めとなった。もっとも最大の原因は、採点に当たっての客観評価の不在にあったことは言うまでもない。

毎年4,000から6,000名を超す受験者があり、全員受験の科目であったから担当は過労であった。採点開始から１週間ほど経たころには、各自イライラがつのり、極めて些細なことで口論が起こり、時には怒号がとび交うことも少なくなかった。

## 英語入試雑感

金沢大学名誉教授　田邊宗一

英語の試験といえば、むかしは英文解釈・英作文、それに英文法の問題と相場がきまっていた。私が金沢大学に奉職したのは1959（昭和34）年30歳のときだったが、そのころの入試問題はお偉い教授の先生方が作られ、英文解釈は１問５～６行の長いものが、二つも三つもあり、英作文は「読んだ本の一言半句でも血となり肉となれば…」式のかなり文学的な、英訳しにくいものだった。採点のとき、疑問の箇所について出題者とおぼしき教授方にお訊きしても「適当にやって下さい」といわれるだけで、問題作成のとき解答を考えていないのは明らかだった。今でも大学は入試問題の解答を発表しないのがふつうである。解答は新聞か受験関係の出版社が出す解答集に頼るしかない。理科系の問題が採点のときになって、出題者や採点者が解いてみて、実は解答不能の問題だったということが、今もって時々起こっている。国語や外国語は解答不能ということはまずないだろうが、しかし、それでも解答を考慮に入れずに問題を作るということは、いうまでもなく甚だ危険である。出題者が自分で解いてみなくては、問題の難易度を十分に判断できるはずがない。

どの問題の採点が当たるかも、採点の当日になって上の方から強制的に割当てられるのだった。若い教員たちは、なるべくつけ易い問題が当たりますようにと祈るわけである。長い英文解釈が当たると１人何千枚というノルマを１週間ないし10日でこなさなくてはならない。30代の人一倍馬力があり、採点のスピードも速かった当時でさえ、朝の９時から夕方の５時までかかって、約500枚の答案をつけ終わって家に帰ると疲労困憊、テレビを見るのにさえまっすぐ座っておられなかった。

ある年、出題の責任者の役が助教授の私に回ってきた。出題委員の中には教授の方も１人入っていた。私は引き受けるに当たって、最終的には私の決定に従ってもらうという条件をつけた。そしてかなり思い切った改革を試みた。まず英文解釈や英作文はせいぜい３行ぐらいの長さにとどめること。解答がそれ以上の長さになると、採点のとき１度や２度読んでも、なかなか頭に入って来なくて、どうしても採点が不正確になる。１日に何百枚

もの答案をつけなくてはならないのである。厳密な採点を期する上においては、下線を施した部分訳にせざるをえない。それから、英文解釈は正確に英語を理解しているかどうかを確かめる良い方法ではあるが、一面、部分的にはそれらしい日本語に訳してあっても、実は全体の意味が答案の作成者にわかっていないということが少なくない。それで長文設問という形式を編み出して重要なポイントを（採点の便宜上）限られた語数で説明させることにした。この形式はその後、全国的に拡まった。さらに問題を作るとき、必ず作成者の間で解答を作ってみる、そして採点のときそれを解答例として採点者全員に配ることにした。それから、採点に入る前に、同じ問題を担当する採点官の間で受験生の答案を見ながら打ち合わせをして、採点のばらつきをなるべく小さくするように努めた。そして最後に、どの問題を採点するかは、原則としてくじで決め、負担の公平化をはかることにした。以上の点は、その後、共通一次、大学入試センター試験が実施されるようになっても、そのまま踏襲されていたが、果たして今はどうなっているだろうか。

## 数学採点苦労記

金沢大学経済学部　渡邉力

私が入学試験の出題や採点にかかわるようになったのは旧教養部へ移った1970（昭和45）年からで、理学部の助手時代には採点に参加しなかった。これには理由がある。何がきっかけだったかは忘れたが、理学部の中で助手を研究者として位置付けるかどうかという議論が起こったことがあった。私は助手の代表として、元学長で当時化学科の教授だった青野茂行先生と研究者像や研究業績の意味について議論したことがあった。論文をたくさん書くことは本質的なことではないという私の主張に対し、先生が「ホームランバッターは３割打者である」と言った言葉が今でも印象に残っている。このことの是非はともかくとして、研究に対する先生の真摯な態度、私のような青二才との議論に真剣に応じてくれた先生の姿勢に感激したことを今でも思い出す。

当時金大には、助手を単なるアシスタントまたは自分の秘書としてしか捉えていない教授が少なからずいたように思う。理学部でも数は少ないがそのような教授がいたことも事実である。別の学科のある教授から数学科の中にもそう考えている教授がいるという話を聞き、腹を立てた私は、研究者として位置付けられないものを採点という大事な業務に参加させようとするのはおかしいのではないかと断った。私のために参加するようにと言ってくれた主任教授の気持ちが理解できなかったことを今でも恥ずかしく思う。しかしとにかくこれが助手時代に採点に参加しなかった理由である。

さて私が採点に加わった1970（昭和45）年当時はまだ共通試験のない時代で、しかもすべての学部で数学は必修科目であった。問題も今より多く、理系では５題であった。採点期間は今より４日ほど長かったように思うが、期間内に採点が終了できるかどうか心配で、本部庁舎で夜９時ごろまで残業したことも何日かはあった。これは私だけでなく常連が数人いた。訳の分からない答案に腹をたてたり、予想もしなかったような方法で解いた

見事な答案に出会い、感心しながら採点したこともあった。

今振り返って見ると苦痛であったという思いはなく、それなりに採点を楽しんでいたように思う。当時は一期校であったせいか、合格したほとんどの学生が金大に入学してきた。見事な答案を書いた学生がこの中にいるかもしれないと思うと講義にも熱が入った。勿論素晴らしい答案を書く受験生はいつでもいる。しかし共通試験が始まってからは、いい答案をみても「この学生は金大には来ないのではないか」とつい思ってしまう。その意味で虚しさを感じることもある。それはともかく、採点という作業を通して学生の学力の様子も判断でき、教師と学生との繋がりのようなものを私なりに感じていた。ここ２年間は評議員であったということで採点を免除されていた。しかし４月になって１年生に講義しても学生との間に距離を感じた。これはあながち年のせいばかりではないだろう。採点という作業は、細いけれど学生と教師とを結ぶ一つのパイプの役割を果たしており、教師にとって大事な仕事であるというのが最近の実感である。

## ピンク色の鉱物は何ですか？

十文字学園女子大学・金沢大学名誉教授　高山俊昭

金沢大学が角間に移転した当時、角間キャンパスにはマムシが出るという噂が立った。可愛い学生がマムシに噛まれて命を落としては大変と、慌てた事務当局はご丁寧にもマムシの絵を描いた警告書をキャンパスのあちこちに張り出したが、皮肉にもこれが「マムシも知らない金大生」を天下に周知させる結果となった。勿論金沢大学の名誉のために一筆書き添えておくのだが、マムシを知らないのは、何も金大生に限ったことではない。世は理科離れの時代を迎え、頭では知っていても実物を知らない子供たちが急増している。

文部省の理科教科指導要領に、「自然に親しみ、自然に触れた実際・実物に即した教育として、実習・実験などを重視する云々」とあり、だとしたら高等学校の教育はそのように行われるべきだし、少なくともマムシくらいは見たことのある学生を迎えたいと金沢大学が思うのは当然であろう。

大学で地質学を専攻する学生は、まず野外実習で自然に親しみ、一方、教室では岩石や鉱物、あるいは化石の肉眼鑑定のトレーニングを受ける。私は学生の時、巻き貝の化石「リンコネラ・ラクノーサ」を「倫子と寝れば楽なのさ」と覚えて、いまだにこれを忘れない。東大における鉱物肉眼鑑定の試験で、教授が鉱物の中にこっそり氷砂糖を混ぜておき、学生を四苦八苦させたという笑い話も聞いた。こういう習練が野外における地質調査に役立つのだ。そして野外に出て実物に接してこそ、地学を学ぶ楽しさを味わうことができるのである。

花崗岩の中に常に含まれる鉱物は？と問われて、暗記をしておれば正長石と石英と解答するのは容易だ。しかし山道で拾った石ころを花崗岩と認定することが、何人の高校生に可能であろう。またかなりの人が、正長石と石英がどんなものか知らない。そこで地学の入学試験に、岩石や化石の肉眼鑑定を取り入れようと考える大学人がいてもおかしくない

のだが、センター試験に代表される今日の入試の現状を考えると、それが殆ど不可能に近いことは、誰にとっても明らかである。

理学部のＳ教授、教育学部のＦ教授、そして教養部の私の３人が地学の入学試験出題委員に選ばれたのは、もう20年以上も昔のことだ。したがって当時のことの多くが忘却の彼方に消え去ってしまっている。でも入学試験の出題は大学の最高機密に属することだから、いくらもう時効だと言ってもその時の詳細をここに暴露するのははばかられる。したがって僅かな記憶を頼りにあまり信用できないエッセイのようなものをここに書くのは、国家公務員の守秘義務から言って、かえって好都合だろう。

さて３人の出題委員が一堂に会したとき、設問の中に岩石・鉱物の肉眼鑑定を取り入れようと強く主張したのはＦ教授である。さすが教育学部の教授だけあって、高等学校の理科教科指導要領に沿った出題をという考えをかねがねもっておられたに違いなく、あっぱれと言うべきであろう。一方Ｓ教授がそれに難色を示したのも、入試の現状を考えれば、これまた当然とも言えるのである。

さて地学の入学試験に実物を与えての肉眼鑑定を出題しようとすれば、難題は山ほどある。その第一が反対するＳ教授の説得だった。結局Ｆ教授と私が問題を作成するということでＳ教授が納得し、さてそれではどうしようということになって、花崗岩を題材に取り上げ、「ピンク色の鉱物は何ですか？」といったふうに鉱物名を問い、さらにそれをもとに岩石の名前を当てさせることにしようと決まった。月並みと言えばこれほど月並みな問題はない。しかし実物鑑定そのものに、出題の意義があったのである。

さて出題する岩石を宝達山に分布する花崗岩とし、大学の公用車を使って、Ｆ教授と私が能登に採集に出かけた。入試の出題は純然たる公務であるから、公用車を使うところがいかにもけじめを大切にするＦ教授らしいと言えばそれまでだ。しかし実状は入試出題委員の誰一人として、運転免許証を持っていなかったに過ぎない。

次にわれわれの頭を悩ませたのは、地学を選択する受験生の数がわからないことであった。とても100人を超す受験生が地学を選択するとは考えられないものの、万が一ということもある。とにかく100個ほどの出題標本を準備すれば、おそらく間に合うだろうということになった。標本は岩石の片面をツルツルに研磨し、しかも解答を求める鉱物が出題標本の中に含まれていなくては話にならない。さらに受験生によって不利になることがないよう、すべての標本はできる限り均一でなくてはならない。加えてペーパーテストではない、何か今までとは違ったテストだということが事前に漏れないようにしなくてはならないのである。気を遣わなくてはならないことは多々あった。

私が学んだ大学の地学科は、創立当時２人の教授が大喧嘩をし、地質学古生物学教室と岩石鉱物鉱床学教室という二つの学科として独立した。以来両学科は仲が悪く、お互いに相手を「葬儀屋」「石屋」と呼んでことあるごとに争った。Ｆ教授も私も葬儀屋で、その葬儀屋が石屋の真似事をして大量の岩石標本など作ったら、同業者は吃驚仰天し、その意図は何であろうと訝るに違いない。したがって２人は人の寝静まる丑三つ時の来るのを待っ

て、金沢城内教養部地学棟の地学実験室で、密かに岩石標本の作製に熱中したのである。考えてみれば真夜中に大学の先生が２人、金沢城の中で隠密裏に岩石を切断し、研磨している風景を考えただけでも身の毛がよだつというものだ。

次に出来上がった100個の標本を丈夫な封筒に一つずつ入れるのだが、Ｆ教授は事務当局に丈夫な封筒を100枚購入するように注文し、事務官は大学所定の封筒があるのに無駄な封筒は買えないと拒否する一幕があり、丈夫な封筒が必要な理由を公表できないＦ教授は怒り心頭に発していた。その結果丈夫な封筒をどこでどのようにして手に入れたのか今では記憶に定かでないのだが、苦心惨憺の末、とにかく入試当日の早朝、めでたく100個の標本を揃えて入試本部に運び込むことができたのである。

さて入試当日、われわれ出題委員は学生部長室に詰めていた。試験が始まり、今ごろ封筒から転がり出た石ころに、100人近い受験生が目を白黒させているだろうと、われわれ出題委員はニヤニヤ笑っていたのだが、あとで受験生がたったの９名と知らされ、100個の標本を作ったあの苦労は何だったのだろうと、ヘタヘタと腰を抜かすほどの徒労感を味わったのもまた事実であった。

しかしながら、われわれの出題の反響は、それはそれは大変なものであった。たしかＮＨＫがいち早くニュースで取り上げたはずだし、朝日新聞はじめ全国紙が一斉にこれを報道した。翌年、この問題は文部省の入試問題要綱にも収録され、「出題には大変苦労があろうが…」とのコメントとともに、「このような実習・実験・演習に即したテストが必要であり、重要である」と高く評価された。金沢大学50年史の中で、これは特筆すべき出来事として、一章が割かれても良いくらいの快挙と言わずして、何と言おう。

地学は野外の学問である。机の上でうち立てられたもっともらしい理論も、野外観察で明らかになった小さな一つの事実によってひっくり返ることは珍しくない。この分野の研究では、研究者の多少の頭の悪さも体力がカバーしてくれる。

あれから20数年が経った。われわれの出題が高校教育に一石を投じたとしても、子供たちの理科離れは今日に至るも解消されない。受験生は依然として教室で教えられたことを丸暗記して高得点をあげ、金沢大学に入ってくる。一方あの時の出題委員だったＳ教授もＦ教授も、既に金沢大学を退官して名誉教授となられた。私も金沢を離れて久しく、やはり高齢だ。おまけに最近医者から癌だと宣告され、手術をしたものの死に神は三途の川の向こう岸で私を手招く気配だ。もう山を歩く体力はない。だとしたら私は生来頭が悪いのだから、もう研究者としては通用しない。

### 日本史出題の思い出

金沢大学名誉教授　高澤裕一

私が大学を受験した1951（昭和26）年、隣の石川県の金沢大学は受けたい大学であったが、高校の体育祭の準備に10月末まで追われていたため勉強時間が足りなくなり、理科二科目受験を避けて、英・国・数のほか理・社が各一科目と総合科目とで済む他の大学を

選んだのであった。

その12年後に金沢大学へ赴任して、こんどは出題する側に立つことになった。当時は日本史の教官は文学部と教育学部で４人しかいなかったので、毎年入試問題を作り、監督をし、採点した。採点は１週間ほどかかった。

当初は、自分の専門に近い所を分担して出題したものの、それでも、さらに狭い分野に特化した自分自身の知識・関心と、高校教科書のごく表面的な概述とのギャップにとまどいながら問題を作った。だから、気の乗らないまま、義務的に作業していたといってよい。その後、経験がふえて慣れてくると、新しい工夫をしたり、時にはもっと別の視点からも教えてほしいという思いをこめて問題を考えたりもした。しかし、それで良問を作れたとも思えない。

また、はじめのころはジャーナリズムの入試への関心が強くなかったのか、問題の正解例や評言は載らなかったし、載るようになってもあたり障りのない評言や、自己評価よりも好意的な評価だったりして、さほどプレッシャーを感じなかった。出題委員同士のチェックも大まかだったから、外の眼をさほど気にしないまま、いささかマンネリに陥っていたと思う。そんな中で、いくつかミスを犯している。２～３挙げてここに懺悔しておきたい。ただ、何年度のことであったかは忘失した。

歴史の勉強は暗記物だと言われているので、年代について直接でなく、事件と事件の前後関係で答えさせることにし、「何時頃か」と聞いたところ、午前何時とか午後何時という答えがいくつも出たことがあった。文字通り時間を聞かれたと勘違いしたためである。今のパソコンでも「いつごろか」と打って「何時頃か」と出せるが、問題文への配慮が足りなかったと思う。現在の教科書を見ると、読み誤らないよう書き方に細かな配慮をしてあることが分かる。

また、「千利休」を誤って「千利久」と書いてしまったことがあった。今ならたちどころに指摘されるであろうが、受験生からも、新聞からも指摘がないままに終わった。気づいた人はいたに違いないと思うが、強いて言挙げされなかったとすれば、良い時代であったと言わねばなるまい。

出題の失敗ではないが、教養部の某先生と組んで入試監督をした時、第１日目の生物の答案をうっかりカバンに入れて持ち帰った受験生（女子）があり、第２日目の朝に届け出た。答案枚数を数え間違った当方も、枚数をチェックした委員も全く気づかなかったのである。当然、生物は零点になったが、その受験生は見事合格していた。

## 共通一次入試導入前後――理系の場合

金沢大学工学部　江見準

共通一次試験は、1979（昭和54）年から始まったが、それまでは国立大学が一期校、二期校に分かれて、それぞれ独自の入試科目・配点を課し実施していた。旧帝大系がすべて一期校に属していたため、人気は一期校に集中し、人気校の倍率は異常に高く、国立大

志望の多くの受験生は浪人するか、彼等が自分より格下と思っている二期校に行くしかなかった。このような実質上の一発勝負の弊害を無くすために、Ａ日程・Ｂ日程入試制度や共通一次試験制度が導入されたと思われるが、この制度は金沢大学の理系学部にもかなり大きな変化をもたらした。

先ず第１に、共通一次試験結果を見て、各受験生は偏差値により自分の実力に見合う大学を選ぶようになったこと。従来は自分の希望する大学を早くから絞り、そこの入試問題の傾向を徹底的に調べて対策を立てた。そこでは本人の実力よりも、希望大学・学部の方が優先されたために、浪人する学生が多かったが、希望を成就した学生の満足感が大きく、入学後の学習意欲に好影響を与えた。これに対して、偏差値により輪切りにされた多くの受験生は、共通一次試験結果だけで志望校をあきらめざるを得ず、真の実力を問う二次試験に集中できず、入学後の勉学意欲にも影響を与えたのではなかろうか。

第２に、輪切りによる学生の力の均等化が挙げられる。工学部では、入学時に既に50人規模の学科に分けられており、彼等は３年生まで一緒に同じ専門分野の教育を受け、４年生になっていくつかの研究室に分散配属される。この間、それぞれの学生の能力が試されるが、共通一次試験以降、この集団には取り立てて優秀な学生も極端に劣る学生も見当たらなくなったことが特徴的な現象の変化として挙げられる。学生の専門的能力は、単に授業からだけでなく、学生間で互いに刺激し合ってはじめて伸びる。自分より遙かに実力が上と感じ取れるような人物がいない集団には、向上心が生まれにくい。共通一次試験を境に、このような違いが顕著になったようである。

第３に、共通一次試験による志願倍率の大幅な低下が挙げられる。医学部を含めた理系４学部の倍率は、実施以前で３倍以上あったのが、実施後２倍台、またはそれ以下にまで落ち込んだ。これは、実力に見合う大学・学部を選ぶようになった結果と思われるが、この影響は特に工学部にとって深刻であった。二次試験の科目数を、理科１科目にするなど（現在も継続）減らしたにもかかわらず、１倍台が数年続いた。このため、複数の学科で思い切って英語を二次試験の科目から外し、代わりに共通一次の英語の重みを増して２年間実施した。この結果、これらの学科で倍率が３倍以上に跳ね上がったが、この措置は学生の質の低下をもたらし、大きな禍根を残すこととなった。入学後の当該学科の学生を調査したところ、約４分の１が志望理由として二次試験の英語免除を挙げ、さらに、その後の勉学意欲・学習態度・能力面においても、これまでの学年と比べて明らかな差異が認められた。この教訓から、直ちに英語を二次試験科目に復帰させたが、このことは英語という教科目が、理系においてもその学生の能力を示す重要なバロメータであり、また受験科目の削減が、倍率の向上があったとしても、学生の質の低下につながるものであることを現実に見せつけられる結果となった。

共通一次試験がスタートした1979年ごろは、長い構造不況から脱しかけていた時期であった。景気低迷による就職難や環境問題などの逆風の中で、高度経済成長期の工学系学部の大幅学生定員増のつけが、入試制度の改定と共に、特に、２番手大学に最も厳しい形

で回ってきたと言えるかもしれない。

## 経済学科時代の入試改革

金沢大学経済学部　海野八尋

1979（昭和54）年以降の共通一次試験実施には各大学と同様、金沢大学でも反対と慎重審議の声が圧倒的であった。残念なことにそうした大学教官の声は反映されず、国大協の要請を受けて本学でも導入が決まった。経済学部移行を目前にした法文学部経済学科ではこれを受けて対応策を模索し、共通一次による悪影響をできるだけ排除し、適切な選抜ができるようにと新たな入試制度を決定した。細部は省くが、その重要な特徴は２次で「社会科（日本を含む「世界史」・「政治・経済」を当日選択）記述（後に論述、当初800字、後に1,000字）試験」を課したことである。全国的にも例の少ないこの論述式の試験の導入を決めた理由は、共通一次試験は知識量を計るのに適した正解選択式であり、複雑な経済現象の因果関係を分析する経験科学としての経済学の学習者の選抜には向いていないというものであった。

この試験方法の導入には高校の社会科教育の改善を求めるという別の目的があった。一つは、社会科科目を暗記科目にさせない、という事であった。「歴史」科目については入試においても暗記した知識量を計るような出題が珍しくなかった。これが“不適切な出題が多い”という共通一次試験導入の根拠の一つにもされた。しかし、共通一次試験は出題の難易度を和らげたとしてもこの傾向を変えるものではないと判断された。もう一つは、複雑な社会現象の因果関係を探るという点で重大な意義のある「政治・経済」が、現実には学校教育において極めて軽視されている事態を改善しようとしたのである。高校の現場では政治・経済の授業がない、あっても「政治」だけで終わり、経済学部出身以外の教員が担当という事態が普通であった。政府・与党の、“日教組による「偏向教育」”非難に対応し、各教育委員会は経済系学部出身者（特に国公立）の社会科教員の採用を回避し、「政経」の軽視を進めた。

しかし、経済現象は複雑化し、経済に関する素養が求められているのに、入学してくる学生の知識は常識を別とすれば小中学校で教えられた初歩的なものしかないために、大学で限られた授業時間数で学生が膨大な知識と高い思考能力の獲得を実現することは容易ではなかった。この状況は共通一次試験によってさらに悪化すると予想された。時代は70年代半ばのオイルショック以降保守化傾向を見せ始め、青年の政治離れ、主体的学習意欲の低下が顕著となっていたのである。

新制大学出身の相対的に若い世代の教官からの新しい提案は、教授会の専権事項たる学生選抜という人事に外部から干渉するという意味も持つ共通試験導入に反発する旧制大学出身の教授達にも受け容れられた。しかし教授も含む学科教官全員にとっても、記述式出題・採点という新しい課題を負わせた。不安を抱えながらもこの方式はとにかく始まった。導入初期の経済学科（学部）の「入れ替え率」（共通一次の定員内上位得点者が合格者にな

らない比率）は突出して高く（時には40％）、この選抜方法の効果は充分あったと評価された。しかし、この方式に惹かれて入学した学生がいた反面、受験者の対策が進んで入れ替え率が低下したこと、他大学と掛け持ち受験がしにくいことが受験倍率低下の一因になったこと、論述試験を主観的評価とする批判的意見が学部内で台頭したこと、経済学部移行後に着任し導入時の議論に参加していない教官の急増、といった事情がこの方式の見直しを迫り、共通一次試験得点比重の増加・試験科目の拡大（社会の中に「日本史」、さらに「地理」を入れる）・選択肢の拡大（「社会科論述」以外に「外国語・数学・国語から２科目選択」の並立）へと進んだ。だが、その後学部入試制度検討委員会が報告したように、共通試験によって受験者の学力が大学間で極端に輪切りされてきた以上、試験の方法の多様化で良い学生を選抜できるのかという根本的な疑問は残ったままである。特に学部間の輪切りは深刻で、導入前に比べ学部間較差は決定的に広がってしまい、現実は多様化に逆行した。導入数年してからの入試制度検討委員会の意見は「今や入試をいじくるより、教育方法、内容の改善と学生の努力で入学後の教育を充実することが正道」、というものであった。

それにしても1979年以降、試験実施主体である大学教官の意見をほとんど顧慮しないできた共通試験導入や、その他の「入試制度改革」は今日きわめて過重な負担を大学に課し、教育・研究に甚大な影響を及ぼしている。この制度は果たして78年度以前より改善・発展したものと評価できるのであろうか。